

本誌「巻頭言」では、教父研究会創立期の模様を荒井洋一先生が見事に活写してください、ベテラン会員の先生方には、各人各様に当時のことを懐かしく思い起こしていただけたことと思います。その一方で、若手の会員にとってはなかなば伝説と化した時代から今日にいたるまで、連綿と変わることなく本研究会の高い志が受け継がれてきたことに、私のような中年会員でさえ驚きを禁じ得ません。そうした先達のご尽力の成果をさらに後進へと受け渡していく責任の重さを考えると、思わず身が引き締まります。とはいえ、新たな試みにも果敢に取り組んでいく挑戦的な姿勢は絶えず持ち続けていきたいものです。たとえば、二〇一一年開催の第一三六回では、本会の新しい試みとしてシンポジウム形式が採り入れられました。その成果が今号の「フィロカリア・シンポジウム」の三本の論文として結実いたしました。大森正樹先生を筆頭に、新進気鋭の若手たちにも力作を御寄稿いただき、本誌ならではの充実したラインナップで第一六号を発行することができました。関係者の方々のご理解とご協力で改めて御礼を申し上げます。

ところで、二〇〇七年より編集幹事として本誌編集にご尽力いただいた田子多津子先生が、ご都合で幹事職を退かれることになりました。古くからの会員の皆様は、田子先生の誠実なお人柄や妥協を許さない厳密なお仕事ぶりをよくご存じのことと思います。私もほぼ同じ時期に事務局を引き受けたものですから、田子先生の細やかなお心遣いには本当に幾度となく助けられました。これまでの田子先生の当研究会へのご貢献に深く感謝申し上げます。

なお、本誌第一六号の発行にあたり、前号に引き続き、教友社のご協力を得、厳しい出版状況の中で出版を引き受けていただきましたことを感謝の念とともにご報告いたします。

(第一六号編集担当幹事 土橋茂樹)